

勃興する中国は如何にして国際的影響力を高めるか

環球網 20170112 16:02:00

作者：周方銀

作者紹介：広東外語外貿広東国際戦略研究員教授、周辺戦略研究センター主任

主要研究領域：中国外交、国際戦略、東南アジア協力等々

阿部信行

(訳者コメント)

中国の環球網に、中国の国際的影響力を高める上で着意すべきこと、に関する論文が掲載されましたので紹介します。

論文は、米国、ソ連、英国、フランスの例を引き、中国としてあるべき政策を示唆しています。

結論は、実力がなければ、影響力は行使できない。実力があっても努力しなければ、影響力は高まらない、としています。

この論文は、中国の特色を主張強調することなく、普遍的な価値判断で論じていますので、わかりやすいと思います。

1月11日、オバマは、シカゴにおいてお別れ講演を行った。その中の一句が中国で波紋を広げた。”ロシア或いは中国は、米国と同等の全世界への影響力を行使することはできない。もし我々がこの種の影響力を自ら放棄したならば、単なる近隣の小国に喧嘩ふっかける大国に変化してしまう”と。

実力と影響力は確かに異なる。現在、中国が直面する重要な問題は、実力を影響力に転化しきれていないことにある。トランプが大統領に就任すると、中米関係は未曾有の激しい”勝負”の場に直面する。全世界への影響は想像できる。

中国に最も必要な行動の一つは、実力を影響力に転化できる有効な方式と道筋を探すことである。

勃興中の国家に属する我々中国人は常に不満を感じている。その理由：中国は、世界第二位の経済大国であり、世界第一の貿易大国であり、また世界第一の製造業大国であるにも関わらず、中国の国際的影響力が実力に見合っていないからである。明らかに差別を受けたと感じるときもある。したがって中国は実力を如何に国際的影響力に転化すべきか、この問題は現在の中国が解決すべき重要課題である。トランプの大統領就任によって、この問題は、緊急の課題となった。

実力を影響力に転化するには、一定の基本条件が必要である。第一の条件は、実力を保持することである。この実力とは一般的実力ではなく、強大な実力である。

強大な実力がなければ、不用意に大きな国際的影響力を追求することはできない。一定の危険性があるからである。強大な実力の支えがなければ、たとえ一時的に影響力を獲得できたとしても、影響力維持に多大な代価が必要になり、その獲得した影響力も、しばしば信頼できなくなることがある。

この方面では、中国の歴史上有名な例がある。それは春秋時代の宋襄公である。紀元前 643 年、斎 HUAN（木へんに亘）公死去後、中原の政治舞台に覇権の空白地帯が出現した。宋襄公は急いで空白を埋めようとした。宋襄公の有利な条件は、斎 HUAN（木へんに亘）公死去後、斎国国君の復位に影響力を持っていたこと、この過程で、2 度も斎国を打ち負かしたことであった。これが彼の覇権への野心を助長した可能性があった。宋襄公は諸侯と同盟を結ぶことによって覇権獲得を試みた。紀元前 641 年、宋国は曹、ZHU（こごとへんに朱）等の国と同盟を結んだ。紀元前 639 年、宋襄公と斎考公、楚成王は鹿上で盟約を結び、楚国に対し楚国の中原の諸侯が自分を覇主として帰順させるよう求めた。これは、危険な動きであった。しかし彼はそれを察知できなかった。2 年目の春、鄭文公は楚に参内した。これが宋襄公の不満を買った。同年夏、宋襄公は鄭を打つため挙兵した。楚は鄭を救援するため出兵した。これが歴史上名高い” HONG（さんずいに弘）水の戦い” (THE BATTLE OF HONG RIVER)である。宋軍は戦いに敗れ、宋襄公は重傷を負い 2 年後に傷がもとで死去した。宋襄公の覇権の追求はここで終わった。

宋襄公の失敗の根本原因は、覇者としての実力を具備しないままに性急に覇権を追求したことにある。彼は、短期間表面的な成功は取得できたが、このようなやり方は、結局その他の大国の抵抗に耐え切れなくなる。実力が明らかに不足しているのに、強い影響力を求めれば、成功を得ることは困難であるだけでなく、危険な結果を招く可能性がある。

これに比べると、朱元 ZHANG（王へんに章）は、群雄割拠の中で、” 高築墻（高い塀を築き）、広積糧（広く穀物を貯蔵し）、緩称王（王と称するのを延期する）” 策略を採り、実力を蓄えることを優先した。王と称するのを延期する意味は、王を称えないことではなく、実力が不足しているときは暫時王を称えず、実力と戦略的状况が有利になる時期を待ってから王を称えることを言う。

国際社会で大きな影響力を行使したいと思う願望は、いわば全ての大国、或いは大国になろうとする国家に共通する願望である。

現代の国際関係の中で、このような願望の下、一部の国家が実力以上の影響力を発揮しようとした。その典型的な例が第二次大戦後の一時期の英国及びドゴール時代のフランスである。

英国は、第二次大戦勝利に当たり巨大な犠牲を払いかつ重要な貢献をした。戦

争の過程で、チャーチルは連合国の 3 巨頭の一人で、その上、戦後英国は、過去の巨大な帝国が残した多くの遺産を有していると考えた。これら遺産は世界中でまだ価値が有るとみられた英国の伝統的勢力範囲にあった。英国は、米国とソ連以外の第三勢力として国際事務で重要な影響力を発揮しようと試みた。かつて英国は、自ら盟主となり、英仏を核心とする西欧同盟の構築を試みたことがある。しかしこの試みは、すなわち”第三勢力”の考え方は、米国が強烈に反対し、最後は成果を得られずに終わった。いわば、英国は、第二次大戦の戦勝国としての地位と伝統的勢力範囲、世界的に広範な連係と友好関係、出色の外交手段等々、国際的に重要な影響力を発揮する多くの有利な条件を具備していた。英国にとって唯一欠けていた条件は、実力不足であった。しかもそのことが影響力を大きく減じた。

これと似ているのがドゴール執政時期のフランスである。ドゴールはフランスを大国と自負する姿勢を堅持し、米国やソ連などの如何なる勢力へも屈従することを拒絶し、フランスを国際政治の中で独立自主及び世界の大国としての地位を政治目標とするドゴール主義を謀求した。ドゴールは、政策面で、NATO からの脱退、フランス独自の核戦力、ソ連やその他社会主義国家との”融和、協力関係”、中国との関係の積極発展政策を採った。そして米ソによる支配体制から離脱したフランスを中心とし仏独聯合を支点とする欧州主権国家が聯合した”大欧州聯合”の建設等フランスの影響力を維持するための政策を採用した。このほかフランスは、第三世界における利益と影響力を保持し増進するよう努力した。いわばドゴールの政策は、フランスの影響力を高める点では成功したが、フランスの実際の実力は、フランスの国際的地位を根本的に高めるには不十分であった。このような政策は、フランスと米国、フランスと一部の欧州国家との関係を悪化させた。

実力は、自動的に影響力に転化するのではなく、転化させるためには意識して努力する必要がある。

国際的影響力は、大国の重要な戦略資産である。これは、物質面の価値と心理面の価値を含め、何物にも代え難い価値が有る。一定の実力のある国家は、高水準の影響力を行使しようとする。すでに影響力を持った国家は、その影響力を輕易に放棄することはしない。

大国が国際的影響力を競うのは当然のことである。しかも国際影響力競争は、ゼロサムゲームの性質を持つ。国際通貨基金や世界銀行等の国際組織の中で、中国、インドの影響力が上昇することは、しばしば西側国家の影響力が低下することを意味する。この方面では全員がハッピーになることは困難である。

一国がもし努力を怠った場合、自動的に影響力低下につながる事はないが、その影響力は長期にわたり実力よりも低下する。これはしばしば起こり得る現象である。

米国を例にとると、南北戦争終結時、米国は広大な領土を保有し、その人口は、英国とフランスを超えた。その工業生産量は英国よりも劣っていたがフランスにほぼ同じであった。そしてその他の国家を凌駕し、米国の農業生産量は、世界一であった。1866年、英国雑誌「オブザーバー」は、嫉妬して”もはや米国は疑いなき一流の強国である。このような国家は怒らせたら危険である。その国に進攻することは不可能である”と指摘した。欧州の多くの有識者は早くも米国は世界経済の巨人になる、と予見した。そしてさらに米国は世界の政治舞台でその経済實力にふさわしい働きをするであろう、と。しかしその後長期間、米国は国際政治において脇役であった。この方面で注意すべきことは、米国が

勃興したことや大国の地位を獲得したことではなく、米国が重要な国際事務に重要な影響力を行使できるようになるためには、これほど長い時間がかかったということである。

第一次大戦の後にあっても、米国経済は優勢を保っていた。人口、農業生産、原材料、工業能力、及び金融資本等、すべての領域で米国の規模と効率の世界一であった。米国の金の貯蔵量は世界各国の総量の半分を占めた。1920年、米国の軍事支出は大国の軍事支出の31%を占めた。米国の参戦は、戦争の結果を左右する鍵となった。このような有利な条件にも関わらず、第一次大戦終結後、長年に渡って米国は、その實力にふさわしい国際的影響力を獲得し保持することはなかった。第二次大戦が勃発するまで依然として国際政治の中心は欧州であった。

これとある程度似ているのが第二次大戦勃発前のソ連である。経済制度と統計方法が異なるので、ソ連経済と西側資本主義国家を如何にしたら平等に比較できるか、これはずっと経済学の難題であった。鋼鉄の生産量、自動車の生産量、発電量、工作機械の備蓄量等の指標から見ると、1939年欧州大戦が勃発する前、ソ連の工業規模はドイツより低かったが、英国よりは高く、欧州では第二位で、世界では第三位の水準にあった。ソ連は、工業技術方面で明らかに米国、ドイツ、英国よりも遅れていたが、広大な国土と人口規模により、その総合實力は見るべきものがあり、欧州では一流の強国に属すべきであった。しかし第二次大戦以前のソ連の国際的地位は低かった。当時のソ連の真の實力と影響力の間には明らかに大きな差があった。

国際関係の中で、實力と影響力の間に存在する落差は常に見られる現象であるが、この落差は頗る顕著に現れる時がある。したがって強い力のある大国にとっては、適切な政策を採り、意識して實力を影響力に転化することが常に求められている。

以上